立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
在外研究
２０１５年度研究成果報告書

研究代表者	所属部局･職		氏　名	
	文学部・准教授		阿　部　賢　一　　印	
研究課題	カレル・タイゲ研究――シュルレアリスムと現象学の関係を中心に			
全研修期間	２０１５年４月２５日　～　　２０１５年７月２４日（９１日間）			
経　　費	年度	SFR 申請額	所属学部からの補助額	SFR 助成額
	2014 年度	円	円	円
	2015 年度	1,046,670 円	300,000 円	746,670 円
主な滞在国及び研究機関名	国　名	研究機関名		
	チェコ	チェコ科学アカデミー美術史研究所		

研究成果の概要（図・グラフは使用しないこと）

本研究の目的は、チェコの前衛芸術の中心的人物である芸術理論家のカレル・タイゲ（1900-1951）の思想におけるシュルレアリスムの位置を検討すること、具体的には、シュルレアリスムに専念した 1930 年代の著作と「芸術の現象学」を執筆した 1940 年代後半のあいだのタイゲ自身の思想の変容および連続性について考察することであった。

申請者はすでに、チェコの前衛芸術、シュルレアリスムに関する研究を進めており、その成果の一部は、『複数形のプラハ』（人文書院、2012 年）などにまとめられている。だがシュルレアリスムに特化した研究は日本ではほとんど見られない。本研究では、これまでの研究に立脚したうえで、カレル・タイゲという一人の芸術理論家の全貌を明らかにするとともに、シュルレアリスムと現象学の関係というこれまで十分に検討されてこなかった点に照射するという点で独創性を有する。

3 か月にわたるチェコ科学アカデミー美術史研究所の滞在中、チェコ・シュルレアリスム研究の第一人者として知られるレンカ・ビジョフスカー博士の指導のもと研究を進めた。並行して、チェコ文学資料館でカレル・タイゲの草稿研究を進め、未発表資料を多数入手した。その結果、タイゲの「芸術現象学」は、ヘーゲル、フッサールの影響はあるものの、マックス・ドヴォジャークらウィーン美術史学派、ハウゼンシュタインの芸術社会学の影響が強く見られることを明らかにした。ウィーンの美術界との近接性が明らかになり、中欧の文化史の見直しという点においても寄与するものであろう。

具体的な研究成果として、「カレル・タイゲの「内的モデル」考」（『境界を越えて　比較文明学の現在』第 16 号、2016 年、11-25 頁）、「カレル・タイゲと雑誌『デヴィエトスィル』」（『れにくさ』第 6 号、2016 年、221-235 頁）の二本の論文を発表したほか、これらの研究にもとづく、包括的な単著を年内に刊行予定である。

研究成果の概要（つづき）

キーワード（研究内容をよく表しているものを５項目で記入）

〔カレル・タイゲ〕〔シュルレアリスム〕〔内的モデル〕〔前衛芸術〕〔中欧〕

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）
①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

① 雑誌論文

阿部賢一「カレル・タイゲの「内的モデル」考」、『境界を越えて　比較文明学の現在』第 16 号、2016 年、11-25 頁。
阿部賢一「カレル・タイゲと雑誌『デヴィエトスィル』」、『れにくさ』第 6 号、2016 年、221-235 頁。